

## 研究成果の要約

国境を越えて学ぶ学生の異文化・異言語接触についての気付きを喚起することを目的に、研究者チームで調査、討論、記述を行い、数名の編集者が教材作成を行なった。異文化が接触する場面でどんな発見や創造、摩擦や混乱が生まれるかについて事例を挙げ、研究者チームが聞き取り調査を行い、それをチームの中で討論し、多様な解釈を紹介した。研究者チーム14名は、国籍がアメリカ合衆国、イギリス、インド、台湾、中国、日本であり、年齢層は20代前半から40代後半まで、男女比は4:3、職務または研究で言語文化、ジェンダー、教育交流、留学生相談、文化比較等に携わっていた。その他ラテンアメリカやアフリカ出身の研究者など、様々な文化背景を持つインフォーマントから協力を得た。

国籍や文化背景の異なる参加者による調査・研究・討論を経て解釈記述を行うことにより、解釈の過程または読者が理解する過程で生まれがちなステレオタイプを可能な限り廃し、教育者が介入しない自習形式によってでも、まずは広い視野を持ち、その後自らの方向性を探ることができるような教材作成をめざした。記述には補助的共通語としての英語を使用し、様々な言語背景を持つ読者がわかりやすいような英語で記述することに重点をおいた。

その結果、事例および解釈の紹介においてはたいへん興味深いものが作成できたと思う。大学内、職場、ホームステイ、旅行など異なる場面での、学生、職業人、旅行者、など異なる立場の人々が関係する、数十年前の事例、現在の事例、など、様々な場面と状況での事例を扱い、その解釈についても様々な意見を出し合い、取り上げることができた。多くの研究者や協力者が、多大な時間をかけ、参加し討論した中での結果といえる。読者にその結果が伝わることを期待している。

今後の課題として残ったのは、事例として創造や発見などの事例も多く取り上げ、異文化接触をより積極的観点から捉えるということである。今回は事例が摩擦や混乱に偏りがちであり、討論の過程では出てきた積極的観点が記述しきれていないことが残念である。また、事例やその解釈の中で出てくる用語や事実関係、先行研究について、説明欄や一覧表を作成することを考えていたが、様々な制約の中で実現に至らなかった。今回はそれらの課題に取り組みたい。

また、1年間以上をかけて多人数が研究を進めひとつの成果物を作成すること自体の楽しさと困難さを経験したことは、参加者すべてにとって、今後の研究や教育、社会活動に携わっていくうえで大きな糧となった。

田中京子  
James Lassegard